

□川崎病の病因および発症機序に関する免疫病理学的研究

奥村 康 (順天堂大学免疫学教室)

現在までのところ各研究協力者とともに、先に提出した研究計画概要にそって、川崎病の病因および発症機序についての免疫病理学的研究をすすめてきた。

研究協力者の白井俊一(順天堂大学第2病理)は、川崎病患者の皮膚生検材料の浸潤細胞についてモノクローナル抗体を用いて検索した。皮膚生検材料には、主にT細胞および単球が認められたが、B細胞はほとんど認められなかった。T細胞のうちでは、ヘルパーT細胞の浸潤が優位で、Ia陽性T細胞も認められた。この浸潤細胞の意義につきさらに検討中である。

吉木敬(市立札幌病院病理)は、主に電子顕微鏡により本症患者より得られた末梢血リンパ球について形態学的に研究してきた。すなわち本症患者16例の末梢血リンパ球を短期間(約7日間)培養し観察したところ、その多くの症例の細胞内外にウイルス様小粒子を認めた。しかしその病因的意義は確立されていない。

吉田光昭(癌研究所ウイルス腫瘍部)は、最近米国より本症の病因として可能性が議論されているレトロウイルスとのかかわりにつき研究してきた。すなわち、川崎病4例の培養細胞の上清中のreverse transcriptase活性を3日毎に測定したが、陽性の成績は得られていない。

武村民子(日本赤十字社医療センター中央検査部)は、1)川崎病急性期の皮膚病変の電子顕微鏡的観察、2)BCG接種部位の皮膚病変がなぜ強く生ずるのか、3)川崎病急性期のリンパ節病変の電子顕微鏡的観察、の3課題について研究中である。すなわち、1)については、炎症反応の病変のなかにはウイルス様粒子は確認できていない。2)については、患者血清中のMuramyl-dipeptide(MDP:BCG菌や結核菌と共通の抗原をもつ成分)に対する抗体価をELISAにて測定中である。また3)については、頸部リンパ節にみられるリンパ球や単球中にウイルス様粒子が認められているが、その病因としての意義につき、さらに研究中である。

古川漸(順天堂大学小児科)は、1)川崎病患者リンパ球のIL-2レセプターなど、2)血中TNF、について研究中である。2)については、川崎病患者血清中にTNF高値を示す例を認めている。

柳瀬義男(日本赤十字社医療センター小児科)は、1)川崎病の血清成分についての分析、2)末梢血単核球培養細胞についての分析、について研究中である。1)については、血清IgGサブクラスの変動を調べ、G1、G3およびG4は回復期に上昇するがG2は変動しないことが示された。また2)については、対照群培養細胞と対比して、川崎病回復期血清あるいはEBウイルス抗体などを用い、蛍光染色により検討しているが、川崎病培養細胞にウイルス抗原などの異常抗原を検出するに至っていない。

以上報告したように、現在までにいくつかのevidenceが把握されてきたが、未だ解明されていない部分も多い。この研究をさらに発展させ、本症の病因および発症機序を解明する考えである。